

「感謝しない場面」の分析による「感謝」の研究 —「物をあげる」という場面に注目して—

岸本 健太（関西学院大学大学院生）

1. はじめに

相互行為において、我々はどうのように感謝を行っているのだろうか。感謝という行為は、日本語教育において入門期に学ぶ項目の1つである。それに加え、社会生活を営む上で必要不可欠かつ、重要な要素であることは、多くの人が実感していることであろう。

これまでの感謝研究の焦点は、「感謝場面における詫び表現」に当てられており、三宅(1993)は、自身の利益や相手との関係性、借りの有無などによって選択されていると述べている。三宅(1993)の研究を受けて、それ以降も感謝の表現選択について、主にアンケート調査を行い、ポライトネスやフェイス理論を用いて説明する研究が多く、特に2000年以降、他の言語使用者の意識と比較する対照研究が盛んである（秦, 2002; 大谷, 2003; 中村, 2006 など）。これまで、多くの研究が話し手の内面に關心を寄せてきた一方で、実際の会話における感謝の行為を分析する研究は非常に少なく、感謝という行為がどのように行われ、どのような役割を果たしているか、という点についての分析はほとんど進んでいない。

本発表ではこうした現状を鑑み、「物をあげる」事例を2つ取り上げ、会話分析の手法を用いて、話し手と聞き手の視点からの分析を行っていく。そして、分析から得られた知見を、感謝という行為の全貌を明らかにするための足がかりとし、感謝研究の新たな視点を示していく。

2. 物を「あげる」「もらう」という行為

何かを誰かに対してあげたり、誰かから受け取ったりするとき、我々は大抵何かしらの発話を動作と同時に行う。それらは、単独では十分な行為となりにくいが、相互に補完しあって1つの行為を築き上げている。まずはこれについて以下に述べる。

ここで用いる事例は、ある大学の共同研究室で起きた会話で、J（画像右側）が研究室に置いていたお菓子を、部屋に入ってきたS（画像左側）に渡しに行く場面である。

書き起こしに用いた発話用の記号と、非言語用の記号については、表1と表2に示す。非言語の記号について、表2を見ながら(1)の3～5行目のJM/Moveという動作を説明すると、Jの体全体の動き(Move)が3行目のSの発話「いつも」の「い」のタイミングで止まった(Stop)ことを示している。また、図が示す場所が分かりやすいように、図がある部分の発話は「□」で発話を囲んでいる。

表1. 発話の書き起こし記号

記号	意味	記号	意味
[]	発話の重複	h	呼気
=	前後の発話が間髪なく続く	.h	吸気
(数字)	沈黙の秒数	.	下降調の音調
¥	笑っているような発話	,	継続調の音調
:	音の伸び	?	上昇調の音調
<u>下線</u>	発話の強調	´	やや上昇調の音調

表2. 非言語の書き起こし記号

記号	意味	例	例の意味
名前 / 部位:	動作の主と、その部位	J / L.Hand	Jさんの左手
! ()	動作のタイミングと内容	!(raise)	手をあげる
- (ハイフン)	一連の動作をつなぐ	!(raise)-!(pinch)	手をあげ、そのままつまむ
- (アンダーバー)	動作の詳細を示す	!(hand out _ hold)	差し出して保持する

(1) [LCC_cocolate]

01 J : せとうちさん どうぞ:[:´

02 S : [あ! =

03 S :=[¥ す い ま h [せん] いつも ありがとうございます¥

04 J : [aha hah hah hah [い(h)い(h)で(h)す(h)い(h)い(h)で(h)す

05 M : [AH hah hah hah hah hah

S/Move : !(back)

J/Move : !(stop)

J/LR.Hand : !(hand out _ hold)

S/L.Hand : !(raise) - - - - - !(pinch)



図1. せとうちさん 図2. すいません 図3. いつも

1行目以前からJはお菓子の袋を持ってきて、1行目で声をかける際、Sに対して差し出す動作を行っている(図1)。この「相手にお菓子をあげる」という行為を達成する上で必要なことが2点ある。1つは、当然のことながら、身体動作の次元において「渡す」ことにあるが、それだけでなく、相手に受け取ってもらえるように、適切にふるまうことが必要となる。もし無言で渡そうとすれば、相手が不審がって拒否する可能性や、そもそも「あげる」行為であると理解されない可能性が生まれる。そのため、「あげる」行為を確実なものとするためには、動作だけではなく発話も必要となる。この点についてJは、ただ渡すだけでなく、「どうぞ」という発話を伴わせる形で「あげる」という行為を組み立てている。

次に、「どうぞ」とお菓子の袋を差し出されたSは、なんらかの形でそれに応じることが期待される。ここでの応じ方においては、あげる側と同様、もらう側においても発話と動作の両立が必要となるだろう。少なくとも「もらう」のであれば、受け取る動作が必要であることはもちろん、適切な発話がなければ、無礼なふるまいと捉えられかねない。ただ、「もらう」という行為を達成する上で使用可能な発話の種類はさほど多くはなく、大抵の場合がこの事例と同様、「ありがとうございます」のような感謝の意を述べる。

以上のように、「あげる」と「もらう」といった行為の中には、「どうぞ」の発話と「差し出す」動作、そして「ありがとうございます」の発話と「受け取る」動作が内包されていた。内包されたものは、単独では課題に対する解決法として十分な役割を果たせないが、互いに補い合うことで、行為を構成することができる。

Mondada(2014)は、会話における指示の研究の中で、指示の発話だけを取り上げるのではなく、動作と同時に観察する重要性に触れ、「行為」というものは、言語や動作、視線、その場の環境など、様々な要素が複雑に絡み合っ、その「Gestalt」を形成すると述べている。Mondadaの研究は指示を中心としてはいるが、今回の事例においても同様のことが言えるだろう。

今回の事例での発話や動作といった構成要素は、それぞれにおいて「どうぞ」という発話には「ありがとう」という発話が、「差し出す」という動作には「受け取る」という動作が、非常に期待されるように思われる。すると、一見すると「あげる」の状況にあっても、その構成要素が異なれば、「もらう」方法にも違いが生じるのではないだろうか。これについて3で見ていこう。

3. 「感謝しない場面」で何が起きているのか

次の事例は、ある家での7人の友人同士の食事場面を撮影したもので、仕事で遅れてきたHが、お土産が入っているともしきビニール袋を持って部屋に入り、挨拶を終えた直後の場面である。それぞれの名前と位置関係は以下の図4に記す。

基本的には「物をあげる」という点で、(1)の事例と共通しているが、ここでの「あげる」行為は、むしろ「提示」に近いものと言える。これについて以下で詳しく見ていこう。

3.1 応答の位置での「提示」

(2)[umaibou]

```

01 M      :ホリウチまたタクシー乗らな、バス乗り遅れるで、=
    K/Face  :                ! (up)                !-----!(left-down_chase)
    K/R.Hand :                ! (grab_hold)
02 K      ::=Huh Huh [Huh
03 H      :                [え'
    H/L.Hand :                ! (put a bag)
04        : (0.4)
05 K      :おまえ heh .heh
    K/R.Hand :!(draw a bottle)
    K/L.Hand :! - - -!(get off a bag---point "umaibou"_chase)
06 S      :なにを持って[きた。
    H/Face   :                ! (look into a bag)
07 K      :                [¥おまえ、そんな、¥
    H/R.Hand :                ! (pick)

```



図4. 人物配置 (1人は画面外)



図5. おまえ(05) 図6. なに(06) 図7. そん(07)

2行目から5行目にかけて、KはHの持つビニール袋へ視線を向けた後に笑い始め、「おまえ」という発話に加え、ビニール袋へ向けた指さし(図5)によって、何を笑っているのか、何がその原因なのか、を明らかにする。

6行目でSが「なにを持ってきた」と質問を行うが、これは位置的な問題から、彼自身が指さしの対象は分かるものの、中身までは見えていないことによるものと考えられる。これに対しHは6行目のSの「なに」の直後に自分が持っているビニール袋を覗き込み(図6)、その後7行目のKの「おまえ、そんな」という発話の途中で中身をつかむ(図7)。

この「なにを持ってきた」という質問に対して、Hが行う応答には、発話だけで応じる方法と、実際にものを見せる方法の2通りが考えられる。ここでHは袋を覗き、中身を取り出そうとしていることから、少なくとも見せる方法を使おうとしていることが分かる。つまり、先ほどの事例とは違い、自発的にお菓子を「あげる」のではなく、質問への応答として「見せ」ようと、つまり「提示」しようとしている。

3.2 応答を待たずに起きる「評価」

(2)[umaibou]続き

```
06 S      : [なに]を持ってきた.
H/Face   :      ! (look into a bag)
07 K      :      [¥おまえ, そんな, ¥
H/R.Hand :      ! (pick)
08 K      : ¥またどこでも買えるもんを¥ =
H/R.Hand :      ! - - ! (drop-groping_start)
K/L.Hand :      ! (retract)
09 S      : :=うあ:mua たどこでも買える h も h の h を hoh=
```



図8. どこ(08)



図9. 買える(08)

続く8行目でKが「またどこでも買えるもんを」と、お土産に対する評価を行う。この発話の「どこ」のあたりでHは、偶然か意図的かは分からないが、一度つかんだものを手放し(図8)、袋の中を漁りはじめる(図9)。そして漁っている途中、Hが持つ袋(透明なビニール袋)の中身が見えたのか、SがKの発話を繰り返すように、「うわ、またどこでも買えるものを」(9行目)とお土産についての評価を下す。Kによる評価は、あくまでSによる「なにを持ってきた」という質問と、それに対する応答のやりとりに影響を及ぼさない。一方、Sによる評価は、自身の質問についての疑問が解消されたことでの表示でもあり、その時点でHが「見せる」必要性はなくなる。また、この評価自体もポジティブな評価ではなく、「どこでも買えるお菓子を買ってきた男」としての評価に対する抗議や、言い訳のようなものが後に来うことは十分に予想可能と言えよう。

3.3 カウンターとしての新たな「提示」

(2)[umaibou]続き

```
09 S      : :=うあ:mua たどこでも買える h も h の h を hoh=
H/R.Hand :      ! -- ! (draw-turn back)
10 H      : :=¥これは: [どこ]でも買われへんぞ. ¥
H/Face   :      ! (look)
H/R.Hand :      ! - ! - ! (holdout-show-put)
11 S      : [なやそれ.
12 K      : [n あ: ?
13 K      : なにそれ.=
14 K      : :=あ! [それうまい [やつや'
15 S      :      [め.
16 N      :      [あ:..
```



図10. ものを(09)



図11. どこ(10)



図12. 買われ(10)



図13. へんぞ(10)

9行目のSの発話の最後「ものを」のあたりでHは、袋から先ほどとは違う箱を引き抜き、確認するように裏返す。そしてSの発話の後、間髪入れずに「これはどこでも買われへんぞ」(10行目)とSに向けて「差し出し」つつその箱を見せ、発話の終了とほぼ同時に机に置く。

このHの行為は、直前の「どこでも買えるお菓子を買ってきた男」としての評価に対し、汚名返上の一手としてなされたものと考えられる。状況だけでなく、発話形式も「どこでも買えるものを」に対応するように「どこでも買われへん」としていることから、KとSの評価に対するカウンターと言えるだろう。それは言わば、「提示」から「評価」にかけてのやりとりを、再度やり直すようなものであり、Hの「提示」は「評価求め」とまではいかずとも、KやSが「新たな評価」を行うことが非常に期待される。

その後SとKは「なんやそれ」(11行目)、「なにそれ」(13行目)と、新たに提示されたものについて疑問を示し、箱に視線を向ける。確認を終えたKはすぐさま「あ!それうまいやつや」(14行目)と、「どこでも買われへん」について異議を唱えることなく、今度はポジティブな評価を行う。

4. 考察

(1)の事例も、(2)の事例も、どちらもお菓子を「あげる」「もらう」という行為としては同様でありつつも、その文脈や構成要素には大きな違いがあった。(1)では「あげる」側が自発的に相手に「差し出し」ていたが、(2)では1度目は「もらう」側の「質問」に応じる形で、「あげる」側が「応答」の一部として「提示」しようとしていた。また、その後は1度目のネガティブな「評価」への対抗策として、あげる側がカウンター（反撃）ととれるような発話とともに「提示」を行っていた。

結果として、(1)の事例では「もらう」側が「ありがとうございます」と感謝を行い、(2)の事例では「もらう」側が「それうまいやつや」という評価を行うといったように、両者の間には違いが生じた。とはいえ、前者は礼儀正しく、後者が無礼であるかといえ、そうではない。どちらの事例においても、会話の参与者たちは、その場その場の文脈に応じて適切に振舞っている。我々は、ただ単に「お菓子をもらったら感謝する」のではなく、個別の場面における文脈によって、それに応じたふるまいを行っている。そうした文脈は、「あげる」「もらう」といったラベル付けでは表出してこない。発話や身体動作など、相互行為における資源を1つずつ、つぶさに観察し、それぞれの行為に視点を向けることで、そのやりとりにおける本質が見えてくるのである。

以上の点を踏まえて、今回の2つの事例の比較から、「感謝」とは、心情的な問題によって生じるというよりもむしろ、会話のルールや型のようなものに則って行われるものである、という可能性を示唆したい。

5. おわりに

本研究では、「物をあげる場面」に注目し、そこでの「感謝する場面」と「感謝しない場面」を会話分析の手法によって分析し、比較することで、「感謝」という行為の性質の一部を明らかにしようと試みた。

結果として、同じような場面であっても、そこで起きていることに違いがあることが分かった。一見すると(1)と(2)の事例はどちらも、その動作はお菓子を「差し出す」ものではあるが、発話に注目すると、「感謝する場面」においては「どうぞ」と「差し出す」動作を後押しするような形式であったのに対し、「感謝しない場面」においては、「提示」の意味合いが強いものであった。そうした「あげ方」の違いが、その後の応答にも影響を与え、(1)では「感謝」が適切であっても、(2)では「評価」が適切である、という違いを生んでいた。

従来の研究では、「行為」自体をカテゴリ化し、そのカテゴリ化に基づいて、「感謝のバリエーション」の比較を中心としてきた。しかしながら、Mondada(2014)も指摘するように、発話や身体動作、視点、その場の環境など、その場で使用可能な資源のそれぞれが複雑に絡み合っており、不可分な Gestalt を構成している以上、構成要素に視点を向ける必要がある。今回、そうした構成要素に焦点を当てて分析を行ったところ、「物をあげる」という場面においても、構成要素が行為全体の方向性を決めていることが分かった。それゆえに、感謝の仕組みを明らかにする上では、「感謝のバリエーション」だけを見比べるのではなく、「感謝の場面の構成要素のバリエーション」を比較しなければ、「なぜ感謝を行うのか」という本質に迫ることは不可能と言えよう。

社会学においては広く認知されている会話分析も、日本語学や日本語教育学においては未だ認知の度合いが低い。しかしながら、感謝に限らず、ある行為の仕組みを明らかにする上で、実際の会話を分析する質的な手法は必要不可欠だろう。

本研究は、著者のみならず感謝研究全体における新たな視点からの一歩を踏み出すものである。今後は、これを足がかりに、長らく感謝研究の焦点が当てられ続けてきた「なぜ感謝場面で詫び表現を用いるのか」という議論についても、再考していきたい。

参考文献

- 秦秀美 (2002). 日・韓における感謝の言語表現ストラテジーの一考察 日本語教育, 114, 70-79.
- 三宅和子 (1993). 感謝の意味で使われる詫び表現の選択メカニズム-Coulmas(1981)の indebtedness「借り」の概念からの社会言語学的展開- 筑波大学留学生センター日本語教育論集, 8, 19-38.
- Mondada, Lorenza. (2014). Pointing, talk, and the bodies: Reference and joint attention as embodied interactional achievements. In Seyfeddinipur, Mandana, & Gullberg, Marianne (Eds.), *From Gesture in Conversation to Visible Action as Utterance: Essays in honor of Adam Kendon*, pp. 95-124. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- 中村香代子 (2006). 感謝ストラテジーの日独対照研究およびドイツ人日本語学習者のストラテジー選択 言語情報科学, 4, 243-257.
- 大谷麻美 (2003). 日・英語における謝罪と感謝-背景心理からの分析- 日本英語コミュニケーション学会紀要, 12(1), 140-152.